

第1問 次の文章を読んで、後の問い（問1～5）に答えよ。（配点30点）

妖怪と幽霊については、特に区別する必要はないとする考え方が存在する。はやく、妖怪博士の異名をとった井上円了は広義の妖怪の中に幽霊も含めて考えていたし、最近でも宮田登氏のように両者の区分にそれ程大きな意味を見出そうとしない学者もいる。さらに一歩進めて、幽霊を妖怪の一つのタイプとみなし、共にマイナス価を持った超自然的な存在であるとする小松和彦氏の説もある。

たしかに幽霊と妖怪の区別はいまいであり、両者を共に超自然的な存在ないし現象と把握した方が生産的な論を生むばあいも少なくない。

しかし、日本人が伝統的にこの両者を区別しようとしてきたこともまぎれない事実であり、日本人の過去から現在に到る精神生活の実際をとらえようとするときに、この両者を区別して考えた方が、一つにするよりもはるかに日本人の信仰や思考法の実態がよく見えてくる。

柳田国男は彼の一連の妖怪研究の結論として、妖怪とは、Xであるという著名な定義を下している。むかし信仰されていた神々が次第にその信仰性を失って、おちぶれていったものが妖怪とみなされるようになったという考えである。

この定義については、その後、十九世紀の進化主義人類学の影響がよくみられ、人間↓妖怪、動植物↓妖怪、妖怪↓神など、その他の可能性のすべてを否定する「一系的妖怪進化説」としてよく批判する小松和彦氏の論などを生みながらも、しかし、妖怪の本質をついた注目すべき定義といえる。

妖怪も広い意味のカミ（精霊）といえる。しかし、妖怪は信仰性を失って人間に悪意を持つようになったAである。人間がカミの段階を経ないで直接妖怪になる例、同様に動植物がそのまま妖怪化する例なども数多く存在するが、妖怪誕生のもっとも基本

的な道筋はかつてカミであったものが祀り捨てられて妖怪化するばあいである。

幽霊もまた広い意味での

B

である。しかも正当に祀られないカミであるという点も

C

と同じである。

しかし、幽霊は人間であったものが人間のかたちをとって出現したものである。これに対し、妖怪は人間以外のかたちをとって出現する。前身が人間であるか、人間でないか、現状が人間のかたちをしているか、人間のかたちをしていない（人間のかたちの崩れたものを含む）か、という点に幽霊と妖怪を区別する一つの目安がある。わかりやすく図示すると次のようになる。

	前身	妖怪
現状	人間 非人間	幽霊
①		
②	③	

この図にはしかしいくつかの注をつけておく必要がある。

雨に濡れた長手²でなあ、車屋の足音が調子よくヒタヒタと聞こえていたが、ふと気がつく¹と車のうしろからペタペタと別の足音が聞こえてきた。てつきり車屋の女房が後押し³をしてるんだと思つてな、車賃を払うとき、「おかみさんの分だよ」といつて、少し割増しをやった。そうしたら車屋が泣きだしそうな顔になって、「また出ましたか」というんだ。よく聞いてみると、車屋の女房は半年ばかりまえに子を生んだが、産後の肥立ちがわるくて、一月ばかりで死んでしまった。車屋はその子を女房の里にあずけて仕事に出ているのだが、「今夜のように小雨の降る陰気な晩には、よくおかみさんが後押しをしてくれたから早くこられたといつて、駄賃をいただくことがあるんです。かかあの奴、あつしの手助けをしようと思つて、あの世から出てくるのでしようが、その心根が不憫^{ふびん}でたまらねえんです」と、車屋は涙声でしみじみ話したのさ。（田辺貞之助『江東昔ばなし』）

この車屋の女房の幽霊は足音が聞えるばかりで、姿は見せていない。このようなかたちをあらわさない幽霊も、人間の属性をそなえ

ていることに注目して D の分類に加える。

毒を入れて魚をとる相談をしていると、知らぬ僧が来て、これを諫める^{いさ}。その僧は団子を食ってやがていなくなった。後で大魚を捕ったら腹から団子が出た。
(柳田国男『日本昔話名彙』)

この大魚は人間の僧のかたちで登場しているが、前身が魚であるので E と考える。

このように幽霊と妖怪の領域は裾野においてはしばしばかさなりあうが、本質的には、現状と前身に人間以外の存在が関与するか、しないかによってかなり明確に区別できるものである。
(諏訪春雄『日本の幽霊』による)

(注) 長手……ここでは長い坂道をいう。

車屋……人力車を引く車夫のこと。

問1 空欄 X に入るのにふさわしい文章はどれか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えよ。

- ア 能力を失い、権威を失墜した神々のすがた
- イ 新たな宗教によって追われた神々のすがた
- ウ 時の流れによって動物化した神々のすがた
- エ 信仰が失なわれ、零落した神々のすがた

問2 空欄 A E に入る言葉を、次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ(同じ選択肢が二回使用されることもある。ただし、すべて同じ言葉を選んだ場合は採点されない)。

- ア 幽霊
- イ 妖怪
- ウ カミ

問3 傍線部1で記された「図」の空欄部①～③に「人間」「非人間」いずれかの言葉を入れて図を完成させよ。

問4

次の文章は傍線部2の表現について説明したものである。空欄 a) d) に入る言葉として最も適当なものを、後の選択肢からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ（同じ選択肢は二回使用できない）。

ヒタヒタ・ペタペタという言葉は、いずれも足音を表す a) 語である。そのうち前者は b) 、後者は c) の足

音を表すが、それをあえて区別して書くことで、車のうしろから聞こえる音が d) の足音であることを表現している。

ア 車屋 イ 車屋の女房 ウ 妖怪 エ 幽霊 オ カミ カ 擬人 キ 擬音

問5

傍線部3とあるが、なぜ車屋は泣きだしそうになったのか。その理由として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 亡くなったはずの妻が、いまだに幽霊として現れてくることへの恐怖。

イ 死後もまだ自分や子供のことを気にかけている妻への深いあわれみ。

ウ 妻を亡くしたことに對して同情し、駄賃をはずんでくれる客への感謝。

エ 亡くなった妻が成仏できず、いまだに迷い出てくることへの悲しみ。

第2問 次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。（配点40点）

人生はむなし。では、なぜむなしなのでしょう。

A なにかのために生きていますからです。なにかのために生きるとき、人はつねにその「なにか」に向かってしか生きられない。「なにか」に従属するしかない。「なにか」に支配されてしまっている。その「なにか」を達成したときも、達成できなかつたときも、人は、「これまでの人生ってなんだったのか」という気持ちに襲われて、むなしくなる。いやむしろ、達成後ないし未達成後のそのむなしい気持ちを先取りして、「なにか」に向かっていく最中にすでにむなしくなってしまふ。生きる意味などない。なぜならすべてはむなしいから。

こういう態度をニヒリズムと呼ぶことができます。ニヒルとは無とか虚無のことですので、ニヒリズムは虚無主義と訳されたりします。このニヒリズムというものに対して根源的な思索をしたのが、19世紀のフリードリヒ・ニーチェという哲学者です。

ニーチェの考えでは、人がニヒリズムに陥るの②は、「目的」とか「統一」とか「真理」などという虚構を信じてしまうことに起因③しています。そういうものは、ないのです。ないのにあると考えるてしまうと、目的を絶対化してそれに向かって生きたり、**X**を理想化してそうでないものを排除したり、真理を見つけてそれに同一化しようとしてしまふ。しかしそういう態度は、そもそももないものがあると思ひ込んでしまつていくわけなので、そういうことをいくら一生懸命やつたとしても、「無価値性の感情」つまり「価値や意味がないというむなしさ」にますます陥つてしまふのです。

では、人はなぜ、あるわけでもない目的や統一や真理などというものをあると思ひ込んでしまふのでしょうか。ニーチェの考えでは、それは、人間が尊厳を失つたからです。ではなぜ尊厳を失つたのか。それは、人間が自分を、「高い価値のなにか」と同一化したいと思つているからです。典型的なのは道徳です。道徳といへば、ふつう、価値が低いとは思われず、価値が高いと考えられている。B 人は、不道徳よりは道徳と自分を一体化させたいと考える。道徳的であればあるほど、高い尊厳を④タイゲンした人間になれるだろうと思ひ込んでしまふ。だから人間は、腐敗⑤するのです。高い価値かどうか厳密に吟味されてもない道徳というものに、自己を売り渡してしまふ。そして自分の価値を高めようとしてしまふ。それは、高価な宝石やブランド品を身につけることに

よって自分の価値を高めようとするのと同じことなのです。

道徳は、それを信じる人間に、目的や統一や真理などという **Y** を信じることを命じます。「他人を手段として扱ってはならず、つねに目的として扱え」「バラバラで無秩序な生を歩まず、つねに統一的で秩序ある生を歩め」「真理をもっとも尊び、真理にもとづいた正しい生を営なめ」。人の尊厳を毀損するこのような命令に、人びとを従わせます。

なぜこういう命令は尊厳を毀損するのか。「高い価値を持つなにか」に人びとを従属させようとするからです。人間は、高い価値のなにかのために生きているのではない。生きていることそのものが、すでに輝いており、尊厳に満ち溢あふれているのです。犬や猫は、道徳と自分を同一化したくて生きているではありません。自分のふるまいがそのまま、種としての犬や猫としてふさわしいふるまいなのです。それこそが、犬や猫としての尊厳なのです。そこに道徳という余計なものを持ち込んで、自らを貶おとしめる必要はありません。

C、道徳に **7** イゾンせず、ニヒリズムに陥らない生とは、どんなものなのか。それをニーチェは、「総合的人間」ということばで表現しています。このことばは彼の **8** セイゼンには本にはならず、遺稿として残されたメモ群のなかで語られています。

この「総合的人間」というのは、同じくニーチェの有名な『ツアラトウストラはこう語った』という本の段階では「超人」と呼ばれていたものです。超人というと、「なにか特別な能力を持った最強の人間」というもののように思っていますが、そうではありません。逆に、強くはなくて弱い人間です。

D、超人も総合的人間も、これまでの人類が「高い価値」と考えてきたものを拒絶するという意味では同じなのです。そして人類の歴史においては、「高い価値」と考えられてきたもの、たとえば道徳や統一や真理などといったものを手にした人びとが、勝利をしてきたのです。そして勝利をした陣営の人びとは、その勝利を他者に **9** テワタさないように、ますます「高い価値」と合一化しようとしてきましたし、そのことによって世界での支配権を **10** ドクセンしようとしてきました。だからこういう人たちは、「強い人たち」なのです。

E 超人や総合的人間というのは、高い価値や道徳などとは無縁なのだから、「強い人たち」からは排除された「弱い人た

ち」なのです。ニーチェ自身の用語では超人は「強い人」なのですが、これは逆説的な表現であって、人類一般の社会でいうなら、「高い価値」を持たない「弱い人」です。

この人たちは、どういう特徴を持っているのか。ニーチェによれば、総合的人間とは、自分のなかにあらゆる矛盾と混乱と対立と他者とを無秩序に混在させる人間です。そこに目的も統一も真理もありません。他者の主体性を自分のなかで多重的に共存させることのできる人間であり、その多数性・多様性をなんらかの「高い価値」の道德や真理などによって整理したり秩序づけたりしない人間なのです。そして、意味も目的も統合性もなかったただひたすら多数性・多様性をありのままに生成させることのできる多重的な主体です。

ニーチェは、来たるべき新しい世紀には、こういうタイプの人間が生まれなくてはならないと考えました。そのときニヒリズムは価値を顛倒させつつ再生し、「生は無価値で無目的だからむなし」のではなく、「生は無価値で無目的だからこそ光り輝いている」という新次元に突入する、と考えたのです。

(小倉紀蔵「目的」「統一」「真理」を捨てよ——弱いニーチェが語ること」による)

問1 空欄 A 〽 E に入る言葉として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ(同じものは二度使わないこと)。

ア それでは イ それは ウ しかし エ だから オ というのは

問2 二重傍線部①〽⑩のカタカナは漢字に改め、漢字の読みはひらがなで記せ(漢字は楷書でいいいに書くこと)。

問3 空欄 X . Y に入る言葉を、本文中からそれぞれ二字で抜き出せ。

問4 傍線部1とあるが、なぜ道德が「余計なもの」なのか。次の言葉をすべて用いて、四五字以内で説明せよ(句読点や記号も含む)。

命令 尊厳 従属 高い価値

問5 傍線部2「総合的人間」の説明として**適当ではない**ものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 「高い価値」とは無縁でいて、他者の主体性を自分のなかでまとめられる人間。

イ 「高い価値」に合一化しないで、「強い人たち」から排除された力のない人間。

ウ 「高い価値」に縛られることなく、あらゆる矛盾を無秩序に混在させる人間。

エ 「高い価値」とは関係がなく、目的もなく、多様な価値観を整理しない人間。

問6 この文章は「なんのために生きているのか?」という問いに対する答えとして書かれたものである。この文章の主張として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア ニーチェのいう「総合的人間」を目指すことによって、「なんのために生きているのか?」という人類共通の問題の答えに着実に近づける。

イ ニーチェによれば、そもそも人生に目的などはなく、「なんのために生きているのか?」という問い自体が、人生のむなしさを象徴しており、無駄である。

ウ ニーチェによれば、人生は目的がないが故に素晴らしいのであって、「なんのために生きているのか?」と悩まずに、ありのままに生きればよい。

エ ニーチェのいう「総合的人間」になれば、「なんのために生きているのか?」などという低次元の悩みにとらわれず、高次元の問いに到達できる。

第3問

次の問い（問1～3）に答えよ。（配点30点）

問1

次の①～⑤の空欄に漢字を当てはめて対義語を完成させよ（漢字は楷書でていねいに書くこと）。

- ① 冷遇―□ 遇
- ② 主観―□ 観
- ③ 受動―□ 動
- ④ 韻文―□ 文
- ⑤ 被害―□ 害

問2

次の①～⑤の故事・ことわざについて、空欄に当てはまる漢字として最も適当なものを、それぞれ一つ選び、記号で答えよ。

- ① 猫の□（場所がとても狭いこと）
ア 耳 イ 手 ウ 頬 エ 額 オ 爪
- ② 生き馬の□を抜く（素早く物事をする事）
ア 足 イ 目 ウ 毛 エ 口 オ 歯
- ③ □をそろえる（金額を過不足なく用意すること）
ア 髪 イ 腕 ウ 口 エ 肩 オ 耳
- ④ □を借りる（自分より実力が上の者に相手をしてもらうこと）
ア 頭 イ 腰 ウ 肩 エ 胸 オ 足
- ⑤ 上手の□から水が漏れる（名人でも時には失敗すること）
ア 手 イ 頬 ウ 腹 エ 口 オ 目

問3

次の①～⑤の人物に関わりの深い作品を、後の作品群から、それぞれ一つ選び、記号で答えよ。

- ① 松尾芭蕉 ② 在原業平 ③ 福沢諭吉 ④ 大伴家持 ⑤ 鴨長明

〈作品群〉

- ア 古事記 イ 万葉集 ウ 伊勢物語 エ 源氏物語 オ 徒然草 カ 方丈記
キ おくのほそ道 ク 好色五人女 ケ 日本文化私観 コ 学問のすすめ